

## 序

僕の専攻はフランス文學である。併しいくら外國文化を研究しても、自國文化に對する知識が豊富でなければ、折角の外國文化に對する知識も生きてこない。要するに自國文化を知らないで、外國文化を研究することは無意味に近いのである。かういふ自覺に達したとき、僕は過時きながら日本文化と幸那文化とを研究した。それ故、僕は貧弱ながら、和・漢・洋の複合體なのである。

そもそも文學を文學の見地からのみ研究したとて、文學を正解することは出来ない。なぜなら文學は一般文化の一環であり、一側面に過ぎないからである。この自覺によつて僕は更らに文學以外の文化面を研究したしたのである。そして自然科學の發展は人心の蒙を啓いて、少くとも人間の社會生活、政治生活上に、宗教とは別種の光明を齎したことを認めた。かくて僕は科學の發達と科學的精神とが文化の發展上に寄與した貢獻に對して深い關心をいだくに至つた。それで此の方面の研究にも手を着けた。だから僕は和・漢・洋の複合體であると同時に、文學と科學との

複合體である。もとより此の複合體の間口が廣く、奥行の淺いことは機自身もよく心得てゐる。

2

昨年五月、上海自然科學研究所は僕の特異性を認めて「中國に於ける科學文獻調査」を囑託した。それで僕は上海に暫く滞在後、南京、杭州、蘇州、青島、天津、北京、張家口、大同を一瞥した。

和・漢・洋の混成體であり、文學と科學との複合體である僕は、中支、北支の風物と眞觀とに接して、新しい印象に打たれた。そして此の印象は僕の意識に幾多の感想を發生せしめた。かかる印象と感想とを集めたのが此の旅行記なのである。

支那旅行者として僕の念頭にコビリ着いてゐた觀念は、西洋の自然科學、特に天文學の漢土輸入といふ問題であつた。また此の天文學を中國に運んできた耶蘇會宣教師と支那最高知識層との接觸現象であつた。言ひ換れば支那に於ける西洋文化の流通現象である。

そもそも千五百四十三年コペルニクスは聖書の天動説に對して、敢然、地動説を公表した。そして神罰を被つたかの如く同日に死んだ。ついでガリレオもまた地動説を發表した。當時はキリスト教の信仰によつて社會が統一されてゐたから、地動説はキリスト教の權威を毀損するばかりでなく、人心の遊離を來たし、延いて社會を分裂せしめる危険があつた。それ故ローマ教會は地動説を異端と認め、この説の信奉を嚴禁し、ガリレオを教皇廳に喚問して、地動説の放棄を命

じた。併しガリレオは地動説を科學的に立證して、絶対に此の説を撤回しなかつた。教會も科學的眞理を彈壓するだけの力を缺いてゐた。宗教裁判所も此の異端者を火刑に處することが出来なかつた。教會はガリレオに對して、三年間、毎週一回、悔悟の讚美歌を唱ふべきことを命じ、ひたすら彼の悔悟を待つてゐた。そして彼の死ぬまで言動の監視を怠らなかつた。この事實から見ても科學的眞理は宗教的マコトもしくは道徳的マコトと同等の價值を持つことが明識されるのである。そして宗教上に殉教者があつたと同じく、ガリレオの如き科學的殉教者のあつたことは十分、識者の一顧に値してゐる。要するに眞理すなはちマコトぐらゐ強いものはない。

キリスト教の傳道師は此の科學的眞理を持つて明末から支那に渡來し、この眞理を布教の手段に用ひた。支那は昔から天文學を尊重してゐたし、支那文明には科學的側面に缺陷があつたから、天文學をはじめ、一般の自然科學が歡迎された。これに反して宣教師の運んできた御本尊のキリスト教は儒教、佛教と衝突して嚴禁され、遂に國外に放逐された。

支那は昔から排外主義、攘夷主義の國だと言はれてゐる。併し明末清初の最高知識層は西洋天文學の優越を認めると同時に、多年の迷夢を破つて西夷の文明を迎へた。要するに優秀な文明は排外的な中國に於いてすら、その精神的鐵扉を開放せずには措かなかつた。そして西洋文明の移植に努めたのは徐光啓であつた。併し彼は天主教の歸信者であつたから、彼の善量に誤解されて、

3

完全に西洋文化移入の實を擧げることが出来なかつた。また康熙帝にしる、乾隆帝にしる、西洋の科學文明を一種の趣味として弄んだために、この文明は漢土に根を下ろすことが不可能であつた。僕は徐家匯の天文臺を參觀し、徐光啓の墓にも參詣した。また徐光啓の後孫、徐宗澤司鐸にも面談した。北京では圓明園の遺跡を再び、耶蘇會士の墓を訪ね、觀象臺に登り、耶蘇會士の製作した天文器械を眺めて、無量の感慨に打たれた。

日本も支那から支那文明、印度文明を移植してゐたから、我が國の思想地盤は支那の思想地盤と大同小異であつた。そして支那よりも三十年ほど早く耶蘇會士が天主教と一緒に西洋の科學文化を運んできた。支那と違つて日本では此の文明が完全に根を下ろし、根を張るに至つた。その原因や事情の差異に就いては他書の中に説明して置いたから茲では反復を避けたい。ただ西洋の科學文明を移植したことの過速が日支國運の分歧點であつたことだけを重ねて申上げたい。

現在の時局、將來の國家地位から考へても、また我が國に於ける自然科學の發達から見ても、政府が科學の振興に努力を拂ふことは當然の處置である。さりながら單に科學的觀點から考へても、直觀の助けがなければ科學の大發達は期待することが出来ない。故に西洋に固有な直觀力の發達を促がすことが、科學その者の見地に立脚して、極めて重大な意義を有するのである。まして優秀な兵器を持ちながら、つぎつぎに敗退して行く、英米軍の醜狀を見るとき、僕はこの慘敗を

かう解釋してゐる。歐米人は科學の發達に依頼し、依存して、精神力の鍊磨を怠つてゐたのである。科學偏重主義もしくは器械文明の極度な發達が今次の戰爭によつて、その弊害を暴露するに至つた。かういふ信念から、僕は精神力の價値を痛感し、物質文明の發達と同時に精神文明の發達を度越せずにはゐられない。

僕は前述の如き貧弱な複合體であるから『藝術の支那、科學の支那』の内容もまた貧弱をまぬかれないことは論理上、明かである。併し讀者諸君が此の旅行記の中から、他人の類書に見られない觀點や感想を多少なりとも發見されるならば、著者の欣快はこれに過ぎない。

なほ昨夏の支那旅行に對して深甚な好意と多大の便宜とを與へられた上海自然科學研究所長、佐藤三博士をはじめとして外地の友人諸君に衷心から謝意を表するものである。

昭和十七年八月

著者

# 目次

## 序

- 一 僕の科學的關心 . . . . . 一一
- 二 何故、支那では自然科學が發達しなかつたか . . . . . 二五
- 三 我が國と上海との歴史的交渉 . . . . . 四八
- 四 上海自然科學研究所の生活 . . . . . 六五
- 五 上海の景観・中日文化協會の講演 . . . . . 六六
- 六 學藝大會と研究室歴訪 . . . . . 101
- 七 徐家匯天文臺と徐光啓のこと . . . . . 110

---

- 八 南京見物 . . . . . 111
- 九 杭州・蘇州見物 . . . . . 118
- 一〇 上海から——青島・大連・天津——北京へ . . . . . 1101
- 一一 景山見物と姑娘のこと . . . . . 111
- 一二 萬壽山と圓明園の遺跡 . . . . . 1130
- 一三 紫禁城と故宮博物院 . . . . . 1150
- 一四 香妃の話、錢稻孫氏・周作人兩氏との會見 . . . . . 1166
- 一五 大同の石佛と北京大學の招宴 . . . . . 1185
- 一六 耶蘇會士の墓と北京觀象臺 . . . . . 1195

たり來たりしてゐる。一隻の小蒸汽船が八幡丸の巨體を前後から押してゐる。巨人の巨首が子供から手を取られて行くやうに、巨體が徐ろに埠頭に近づき、黃浦江の濁水が船體に押されて、波を立ててゐる。機關の音はバツタリやんでゐた。

僕は西洋婦人の隣に立つて甲板の欄干に片手を置いた。すると夏の光線に透められた欄干の金具が焼けつくやうに熱かつた。

僕は佐藤君の姿を見つけて、片手をあげて合圖をした。佐藤君も片手をあげて僕の合圖に答へた。併し船はなかなか埠頭に着かない。もう埠頭には數間の距離しかない。程なく船首と船尾とから、埠頭を目がけて鐵の綱が投げられた。埠頭の男がそれを受取ると、太い鐵の臺へ嵌めた。すると船體は急速力で引きよせられた。いつか出口に梯子段がつき終ると、出迎人がドヤドヤ船内に這入つてきた。佐藤君、三田會の代表者、それから浦八郎君が船に登つてきた。次いで新聞記者がきて僕に色々なことを尋ねた。

間もなく僕は船を下りて、佐藤君と一緒に自動車に乗り、研究所を指して急いだ。日本租界を過ぎ、ガーデン・ブリッジを渡る時、橋の中央部に立つてゐる我軍の哨兵に帽子を脱いで挨拶をした。それからバンドに沿つて共同租界に這入つた。ラッシュアワーのせゐか南京路は非常の雑沓であつた。共同租界を経てフランス租界へ這入り、商店街を通り過ぎると、町通りが閑靜で、

青々と並木が繁り、フランス風の建物が續いて、パリーの郊外をドライブすると同じ氣持を味つた。間もなく僕等の乗つた自動車は自然科學研究所の門を潜つて、所長官舎の前に着いた。

僕は研究所員の出迎を受けて、歓迎の宴に臨んだ。もう七時も過ぎてゐたらう。席場は階下の廣間で、室内は薄暗らかつた。併し窓から柳の梢が見えて、芝生には初夏の光線がアカアカと照らしてゐた。

僕等は圍卓に就いた。僕は佐藤君から支那料理は主賓が先づ箸を着けなければ、ほかの人が料理を喰べられないこと、また皿の替はる毎毎に酒で舌を清めて新しい料理を味ふことなど教つた。一滴の酒も飲めない僕にはこの儀禮が仲々、苦しかつた。折角の老酒も、一寸、舌先を浸したばかりであつた。

晩餐がすむと別室で「支那に関する座談會」が開かれた。佐藤所長と研究員諸君を相手にして、當夜、どういふことを話したか、僕は大概、忘れてしまつた。研究員は皆、元氣瀟刺とした青年學徒で、殊に現地研究者であるから、我々の親へない學殖を持つてゐた。彼等の氣焔が盛んだつたので、正直に言ふと僕は異様な壓迫を感じたのである。そして話題は、到頭、「何故、支那で科學が發達しなかつたか」といふ論題に落ちた。それは極めて重大な問題であり、何處の會合でも自然と論議の主題になるものであるし、かねて僕は此の問題を研究してゐたから、大要、次ぎ

の話を選べた。

「支那では遠い昔から道徳、政治の如き學問が發達し、同時に自然科學も亦、發達の緒に就いたのであります。たとへば筆、紙、墨は勿論のこと、養蠶術、製陶術も支那人の發明であります。殊に今日ヨーロッパで大いに發達致しました羅針盤、火藥、活字印刷術は皆、支那人が發明したもので、支那からヨーロッパに傳つたものであります。ところが其後に至つて支那の自然科學が俄かに發達を停止してしまひました。これは誰れしも不審に考へることあります。

此の問題は既に十八世紀の初頭にフランスで論議されました。御承知の通り支那に参りました宣教師が支那の文化、特に其の精神文化をヨーロッパに紹介し、口を極めて此の文明を推賞したのであります。するとフランスにドルチニス・ド・メーランといふ學者がありました。この人は數學者であり、物理學者であると同時にまた天文學者であります。彼は科學アカデミーに迎へられて、幹事の職に就きました。それから程なく、文學アカデミーにも入選いたしました。科學者にして文學者——これが十八世紀に於ける學者の特徴であります。このメーランが支那に於ける自然科學の停滯といふ題目に就いて大いに不審を感じ、當時、清朝に仕へてをりましたフランス耶蘇會士パールナンに手紙を送つて、此の問題の説明を求めたのであります。このパールナンは康熙帝に解剖學を進講したり、また乾隆時代にはキリスト教の解禁に盡力し

たりした學僧であります。それから「支那人はエジプトの植民なり」といふ説がド・ギームによつて提唱された時、敢然、反對説を唱へた人であります。この宣教師が近世支那に於ける自然科學の停滯といふメーランの質問に對して、次ぎのやうに答へてをります。

(一) 支那人は古來、道徳と政治とを最も尊重して、自然科學の如き形而下の學問を殆んど顧みないのであります。併し天文學だけは農本主義の政策上から歴代政府が最も尊重してをりました。けれども天文臺は禮部に屬してをりまして、獨立してをりません。それに天文臺長に任ぜられても、その官等も俸給も他の官職に比較すれば遙かに低いのであります。そのうへ天文學をはじめ自然科學に屬する學科は「科學」の科目に遑入つてをりません。それ故、天下の秀才は天文學を研究したとて立身出世が出来ません。謂ゆる青雲の志を遂げることが出来ないのであります。然るに經學、史學、法制、倫理、詩文を研究して、科學に及第するならば、官吏となり、權勢を恣にして、富を積むことが出来ます。況んや翰林院學士に登録されれば、皇帝の諮問に應じ、史書編纂の業に携つて、一代の聲望を収めることが出来るのであります。

これに反して天下の秀才が自然科學を修めても、精々、天文臺長に任ぜられるのが關の山で、一生、技術者待遇に甘んじて、下位薄給に泣かなければなりません。それ故、天下の秀才は人文科學の研究に走つて自然科學を研究するものは實に寥々たる有様であります。その結果、支

那では自然科学がヨーロッパに於けるほど長足の進歩を遂げるに至らなかつたのであります。

(二) 以上は支那人の學問的性恪もしくは政策上から生じた自然科学不振の原因であります。支那人の精神その者のなかに根本原因が存在してゐるのであります。それは支那人が研究心もしくは好奇心に乏しいといふことであります。ヨーロッパで好奇心とか研究心とか申しますと、現状に満足することの出来ない不安な心持であります。この不安な心持にかられて、現状を打破して安定な心境に達したいと願ふのであります。かくて人間は一步一步、文化の完成に到達するのであります。要するに研究心もしくは好奇心が支那人に缺けてをります結果、支那人は舊態依然たる學問に安んじて、少しも進歩を計らうとは思ひません。それに支那人は自國の天文學が完成の域に達したと信じてをります。そして天文學の理論や計算が實際現象と多少の差異があつても、これは人力の及ばない所だと諦めて、この缺陷を研究し、飽くまで正確を期さうとは考へてをりません。ですから禮部の長官が天文學を振興して、先任者よりも立派な業績を擧げようとしても、天文臺員は舊慣になづんで、この要求に應じません。それに若し新しい試みに失敗したら、首になると考へて、少しも改良を計らないのであります。畢竟「事なかれ主義」が支配してゐるのです。それ故、明末清初から西洋の天文器械が北京の觀象臺に据ゑ付けられても、支那の觀象臺員は自ら進んでこの器械を利用して、立派な業績を擧げよ

うとはしなかつたのであります。

これまで申し述べました事實が因となり、また果となつて近世に於いて自然科学が支那では停滞したとペールナンは解釋してをります。この解釋には大いに聽くべきものがあると信じますが、僕は自然に對する支那人と西洋人の考へ方の違ふことが、支那で自然科学が西洋に於けるほど發達しなかつた根本原因の一つではないかと思ふのであります。自然科学とは自然を研究する學問であります。支那では自然法則の中に人間の道すなはち道徳を認めてゐることは茲で申上げるまでも御座いません。それに支那人は自然を人間の慈母と考へて自然のうちに天主、救世主を認めてゐるのであります。ですから人智を發揮して、自然を征服しようなどとは夢にも考へなかつたのであります。併し西洋ではキリスト教の觀念によりまして超自然すなはち神と自然とが對立してをります。また此の觀念に従へば自然は物質でありますから卑しむべきものであります。殊に自然の中には人間の生活を害し、人間の精神を誘惑し、人間を墮落に導くものが潜んでをりますから、自然は恐しいものなのであります。そして中世以後になりますと、歐洲人は「文藝復興」の運動によつて、物質や自然の尊ぶべきことを知りまして、自然がそんなに怖しいものなら、これを研究して征服してやらうといふ氣持が生じたのです。そしてデカルトが幾何學の考へ方から學問の研究法を研究して、觀察と實驗の必要を説いて以來、自然

法則の研究が盛んになり、遂に人間は自然機構を理論的に分析して、これを人為的に再建することに成功いたしました。かくて近代に至つてヨーロッパの自然科学は長足の進歩を遂げるに至つたのだと僕は信じてゐるのです。

次に支那人には「人智進歩説」がないから、自然科学が發達しなかつたのではないかと存じます。もしくは自然科学が發達しなかつたので、「人智進歩説」が生じなかつたのかも知れません。そのいづれにしても、この説の生じなかつたことが支那文化の發達を阻害してゐることは事實だと考へます。御承知の通り、支那では政治にしち、道徳にしち、既に周公時代に完成したと考へられてをります。あの中庸にも「仲尼は堯舜を祖述し、文武を憲章す。」と申して、孔子自身は古代理賢の道を祖述し、大成したに過ぎないと主張してをります。殊に孔子が周公を崇拝し、周代の禮政を追慕する情は大へんなもので、「周は二代に鑑み、郁々として文なるかな。吾れ周に従はん。」と言つたり、「甚しいかな、吾れの衰へたるや久し。吾れまた夢に周公を見ず。」と論語の中で申してをります。要するに孔子は周代といふ遠い過去に於て人類の文化が完成したと確信し、後代人が此の理想を追慕して、この理想を再建することが人間の義務だと考へてゐたのであります。一言すれば孔子は尙古主義であり、保守主義者であります。孔子教は支那の國教でありますから、歴代の支那人は極端な保守主義を奉じてをつた

であります。かくて支那人は常に過去を敬慕し、追慕することによつて、現在の文化を過去の理想形態に置かうと考へてゐるに過ぎません。言はば支那人は何時でも後を振り向きながら歩いてゐる國民です。かういふ回顧主義者の心裡に潑刺たる研究心や新鮮な創意創見の生じないのは自然の道理だと考へます。

フランスでは十七世紀から「人智進歩説」が提唱されました。御存じの通りキリスト教はキリストを過去に於いて最も完成した人格だと信じてをります。實際「キリストの模倣」といふ書物があるほど西洋人はキリストの性格を敬慕してゐるのです。この點から見ると、キリスト教も亦、保守主義だと申されなければなりません。従つてキリスト教徒たるヨーロッパ人は皆、保守主義者だと申しても決して過言ではありません。それから「文藝復興」の運動によりまして、當時の知識階級はギリシャ・ローマ文明を崇拝するに至りました。この文明はキリスト教文明以前の文明でありますから、古代文明の禮贊といふ點から觀ても、當時のヨーロッパ人は保守主義者だと申すことが出来ます。

「人智進歩論」を最初から唱へたのはベコンだとも申しますが、デカルトも亦、ギリシャ・ローマ文化の全盛時代に敢然と此説を主張し、自分は學校でギリシャ語やラテン語を學んで、今では忘れてしまつたが、その方が結構だと申してをります。實際、彼の著作は多くフランス

語で書かれてをります。彼は「古人は古人なりといふ理由のもとに我々が古人の前に叩頭する理由はない。古人と呼ぶべきは寧ろ我々である。現代の社會の方が古代の社會よりも老成してゐるからである。そして我々、現代人の方が事々物々に就いて、遙かに豊富な經驗を持つてゐる。」と申してをります。この立場を一層、強化したのはパスカルであります。彼は「眞空論」の中で「人間には言語文字があるから、自己の經驗を文籍に書きとめて置く。すると他人が此の文獻を読んで自己の經驗に利用し、新しい經驗を後代に残しておく。かくて時代から時代を経て人間の經驗がますます豊富になる。すなはち人智が進歩し、人間が完成して、文化が發展するのである。」と申してをります。そしてパスカルは科學上の發見に例をとつて、人智の進歩を證明してをります。たとへば古代科學者は望遠鏡を持たなかつたので、銀河を見ると、銀河の乳白色の部分以外の天體の部分よりも遙かに堅いから、此の部分が光線を強く反射する結果だと考へてをりました。併し近世に至つて望遠鏡が發明されましたので、銀河の中から無数の星が發見されました。それで此の星の集團から多量の光が發射されるといふ説に變つたのであります。

その後、ルイ十四世時代に至ると、文學藝術が非常に發達して、藝術文化が燦爛たる光彩を放つに至つたのであります。その結果、ルイ十四世時代はペリクレス時代よりも文藝の進歩し

た時代だと一部の知識人は認識して、藝術上から人智進歩論を唱へたのであります。處がまたギリシャ・ローマ文化の崇拜から脱しきれない保守主義者が澤山をりましたので、新人と舊人との間に有名な「古今優劣論」といふ論争が生じたのであります。この論争の経過は我々の論題から離れまふから茲では割愛して置きます。

十八世紀に至りますと、學界の新人は悉く人智進歩説を主張して、一切の人間現象は神の攝理にあるのではなく、人間の理性が進歩するから、起るのだと申してをります。ジャン・ジャック・ルツソの如きは理性の進歩による人智の完成性が人間が畜類と異なる所以で「人智は絶対に逆轉せず。」と斷言してをります。とにかくデカルトやパスカルの如き科學者が「人智進歩論」を提唱したことは理の當然だと僕は考へます。御承知の通り、ギリシャにも今日の如き觀察と實驗に基く理論科學は存在しなかつたからであります。そして近代の自然科學は、先づ假説を立てて、この假説が實際現象とピッタリ一致すれば、此の假説を眞理と認めるのであります。併し此の眞理は絶対のものではありません。現在の人智發達の階程に於いて眞理たるに止まるだけです。なぜなら將來、人智が一そう進歩すれば他の假説も生じて、より合理的に現象を解説することが出来るわけであります。かくて自然科學は一段の進歩を経て、ますます眞理に到達するのであります。自然科學の眞實は此點にあるのです。故に自然科學者が自己の學

説を絶對だとするならば、それは自然科学者の目家擲着であります。要するに科學者は勿論のこと、人文科學者も人智の漸次的進歩を信じて、理想を後代に置くものであります。故に一切の學者は絶對に保守主義者でない筈であります。

この人智進歩説に就いては、いろいろ異論があります。文藝家たとへばヴァレリなどは否定してをるやうに思はれます。僕は昨年、東京の博物館で正倉院の御物を拜觀いたしました。その中の多くは唐代渡來の名品であります。展覽品を見ますと、非常に新しい氣がして却つて現代の作品の方が退歩してゐるやうに思はれました。いつたい文化といふものは直線的に進歩するものではありません。時代によつて或る側面の進歩が停止、その代りに他の側面が發達し、時には新しい側面が發達するのです。文藝方面から見ても、近代に至つて前代の知らなかつた側面が發達してゐることは否定出來ない事實であります。殊に近代科學の發展は人類の新しい文化財であります。電信、電話、ラヂオ、飛行機は實に人智進歩の一大例證であります。もし古代文化を盲目的に崇拜し、古人の業績を模倣することに後代人の使命があるとするならば、どこに新人の新人たる存在理由と生活糧を見いだし得ませうか。要するに支那では人智進歩論が考へられず、従つて此説が提唱されなかつたほど、人間が保守的であり、ただ新人は古人の教説や業績を萬古不易の眞理だと信じて、これを祖述するに止つてゐたのです。併し支那

語に「出藍の譽」といふ言葉がありますから、支那人にも多少、進歩的な考があつたかも知れません。併し支那人が古代文化の祖述者であつたことは蔽ひ難い事實であります。日本人は長い間、支那文化を擧收してゐましたから、概して保守主義者であります。

併しながら儒教全盛時代に本居宣長が「玉勝間」の中で古代よりも後世の勝ることを主張してをります。

『古よりも後の世のまされること、萬づの事にも物にも多し。或は古にはなくて、今にあるもの多く、古はわろくて、今の世によきたぐひ多し、これを思へば古はよろづに事たらず、あかねこと多かりけん。

されど其の世には、さ覺えずやありけん。今より後、また物の多くよきがいこゝん世には今をしか思ふべけれど今の人、事たらずと覺えぬが如し。』

とにかく僕は保守主義はそれ自體に於ては何等の價値がなく、國家の傳統を無視して、無情に新しがる思想を擧制して、それを中庸に引き戻すといふ點に於いてのみ、價値があると信ずるのであります。』

僕は斯う言つて席に復した。ついで支那服をきた研究員の岡田君が立ち上つて、支那では「三葉四温」と言はれる通り、萬事が安定してゐるから微差を追究する觀念が支那人に缺けてゐるこ

と、要するに支那人は經驗主義に始終してゐるから、支那には技術があるが科學がないこと、言はば支那には「科術」あれど「科學」なしと結論した。

座談會の終つたのは十二時近くであつた。僕は二階へ上つて、自分の部屋に引取つた。そして單椅子にグツタリ腰をかけた。まだ兩頬が火照つてゐた。それで天井の扇風機をかけてグツンヨリ汗ばんだ全身を冷やした。座談會の連中が歸るらしい。話し聲が夜更けの暗闇に段々、遠く流れて、いつか消えてしまつた。あとはシンとした。時々、階下の廊下を歩く靴音がコツコツ聞えた。

窓からは濃藍色の空に星が降るやうに見えて、高い建物の藁が薄ぼんやり見えるやうな氣がした。その時、僕は東京から上海にきたことをハッキリ意識した。

程なく僕は寢巻に着かへて、隣の寢室に這入り、蚊帳を巻くつて寢臺に潜り込んだ。グツスリ寝込んで眠をさました時には、手足が痒いくつて堪らなかつた。耳許ではブンブン蚊が羽音を立ててゐる。僕は元から蚊に弱いからだから、こりや堪らないと思つた。早速、寢臺を潜りだして、枕許の電燈をつけた。白い蚊帳の裾が床に届かないで、捲かれてゐた。此の際間から蚊の這入つたのだと思ふ。それで僕は蚊帳の裾を寢溝の中へ折り込んだ。それにしても身體中が痒くつて堪らない。手足を掻けば掻くほど、痒くなつて刺れたあとが膨れてくる。上海の蚊は時間が立つ

ても仲々、痒いさが癒らない。併し蚊帳を直したからもう大丈夫だと思つてまた寢臺に就いた。枕許の時計を見ると二時半であつた。それから手を伸して、枕許の電燈を消した。すると五分も立たない中に枕許へブーンといふ蚊の羽音が聞えてきた。僕は反射的に枕許を両手で拍つた。すると手足の痒いさが増してくる。アチコチでブンブン言つてゐる。身體中がますます痒いくなつてきた。癢に障つて堪らない。僕は枕許の電燈を捻り、枕を手にして立ち上がったが、蒲團のスプリングを踏んだので危く倒れかけた。やつと身體の均衡を取り戻すと蚊帳の天邊から隅々まで枕でたたいて蚊を追拂つた。その時ふと胸に浮んだのは「坊ちゃん」の一節であつた。夏目漱石先生が松山の中學に赴任した時、生徒が先生の寢床の中に蝗を澤山入れておいた話である。僕は自分の影法師の中に漱石先生の姿を見出だして、思はず苦笑せずにはゐられなかつた。

ト教を信ずるルイ大王よりフランス耶蘇會士に配與す。一七〇〇年」とラテン語の記録があつた。僕は本發見でもしたやうに嬉しかつた。

ルイ十四世は支那の陶器を見て、その美しさに魅了され、かういふ美術品を作りだす國には立派な文化があるに違ひないと考へた。それで此の大王はポルトガル傳道團員として支那に送られてきた耶蘇會士イントルテエッタとタートルとに對して支那文明を研究せよといふ内命を下した。かくて一六八七年にパリーから兩耶蘇會士の監譯した「支那哲學者・孔子」といふ「大學」「中庸」「論語」のラテン譯がパリーから刊行されたのである。此の書にはルイ十四世に獻げた序文が附いてゐた。その後、ルイ十四世はフランスの耶蘇會士を支那に送つて、傳道の傍、支那文明を研究せよと命じたのであつた。それほど支那文明と支那傳道とに關心を懷いてゐた此の大王が、六分儀を支那在住の目國耶蘇會士に配與したことは當然な可能事である。またあの水準器に裝飾が施してあることから見ても實用に供したのではない。恐らく支那帝王への獻上品であらう。

それは扱ておき、此等の記念品を見ると、僕はルイ十四世のこと、この大王がフランスの耶蘇會士を支那へ派遣したこと……三百年前の侵略主義もしくは植民政策から派生した文化流通、天主教迫害、典禮問題、禁教……それからそれへと色々な史實が新しく胸に甦つてきた。ほどなく

僕はゲルジーさんに案内されて氣象學と地震學の研究室や實驗室を見學した。外では眞夏だけに光線がギラギラして目が痛く、身體中が汗ばんでゐたが、俄かに地下室の部屋に這入ると、ヒヤツとして涼しかつた。

ゲルジーさんはスキツツを捻つて器械を廻轉させながら、色々、説明してくれた。佐藤君は醫學博士だけに、科學的の説明が解るらしい。色々質問してゐた。併し僕には一向、解らない。ゲルジーさんはフランス語を話してゐるが、内容が解らないから、そのフランス語の文句さへも僕には様に解らないのである。

ただ僕に解つたことは此の天文臺から發表される氣象通報のために、長江一帶の人々が非常な便益を被つてゐること、大正大地震の最中には地震計の針が飛びだしたので痕跡を紙上に印刷することが一時、中止されたといふ話であつた。

ゲルジーさんは當時の印刷記録を探さざうとしたが、仲々、見當らなかつた。僕は此の教士から氣象學、地震學の説明を聽いてゐるうちに、次ぎの感觸が意識に浮んできた。

徐家漚は教會である。この教會に天文臺が附屬してゐる。そして天文臺員は僧侶である。言ひ換へれば宗教と自然科學とが提携してゐる。そして僧侶は自然科學者なのである。この關係は中世以來のことであつた。當時の僧侶は「七藝」として文法、修辭、辯證法、算術、幾何學、天文

學、音樂を學んでゐた。「七藝」の目的は皆、信仰と信徒とに便宜を供給するためであつた。たとへば信徒の間に所有地の紛議が生じた時、僧侶は幾何學知識を用ひて、その面積を決定したのである。また天文學は農耕上、必要だつたばかりでなく、教會の祭日を制定するにも必要であつた。一言すれば當時の學問も技術も皆、宗教に奉仕してゐたのである。逆に言へば學問の力によつて先づ善男善女は僧侶に敬服し、次いで彼等の法話を傾聴したのである。かの中世に於いて僧侶が政治に參與して、遂に教權と政權との衝突を來たしたのも畢竟、僧侶が學者であり、その學識が僧侶の地位を強化してゐたからである。それのみか遂に學問が異教徒改宗すなはち布教の要具にまで利用されるに至つた。たとへば支那、日本へ傳道にきたマテオ・リッチ、フランシスコ・ザヴィエールをはじめ、天主教の宣教師は皆、科學知識や科學器械を異教國に將來して先づ科學文明によつて異邦人を驚歎させ、その際に乗じて福音を宣傳したのである。その結果、支那では明末清初の皇帝たとへば恩宗帝も康熙帝も、西洋の科學文明に魅惑されて、心ならずも天主教の傳道を許可したのであつた。日本でも同じこと、キリシタン・バチレンの妖術がどれほど善男善女や、諸侯までも魅惑したか解らない。安土に教會と學校とを設けた信長が西洋の樂器や時計やその他の工製品を愛玩したことは有名な話であらう。天正十年、大友、大村、有馬の三侯からローマに送られた伊東マンシヨの一行が地圖、地球儀、時計などの珍器を携へて我が國に歸つてき

たことも史上に隠くれない事實である。

キリスト教の東洋傳道が一時にせよ、素晴らしい効果を擧げることが出來たのも畢竟、傳道僧の意識中で宗教と學問とが表裏一體をなしてゐたからである。そして近世に至つて自然科學が発達すると共に、科學が宗教から獨立して遂に科學的精神を提げ、宗教に反噬して、その御本尊たる神の存在を否定したのであつた。それにも拘らず、遠東へ傳道にきた耶蘇會士は地球儀や渾天儀や望遠鏡を十字架の先達として、立派に福音宣傳の實を擧げたのである。そして現在、僕等の眼前で、黒い法衣を纏つて、地震計を取扱つてゐるゲルジ師は如實に舊來の傳道様式を踏襲してゐるのである。かやうに中世以來、宗教と學問との結びついてゐたことを考へれば、西洋の僧侶が墨衣の法體を以て、望遠鏡を覗き、地震計を手にしたとて毫も怪しむには足りない。然らば我が國の佛僧はどうであらうか。彼等の中に氣象學や地震學の實驗臺で、その學理的説明を試みられる者が一人だにあらうか。更に日本中を探しても、天文臺の附屬してゐる大伽藍を發見することが出來ようか。實に佛教から見れば、憐むべし、自然科學は縁なき衆生の身なのである。

佛法に「名僧智識」といふ言葉がある。「智識」とは多識博覽の意味ではないかも知れない。併し我々、俗人の考から見れば、佛法の事理に通じ、大悟徹底するには、大智見を必要とすることは言ふまでもない。かのマテオ・リッチにしら、ザヴィエールにしら、全く名僧智識であつた。

然るに今、支那をはじめ大陸に派遣されてゐる我が佛法布教信の中に、リッチやザヴィエールほどの名僧智識を數へることが出来ようか。

さて天文臺の見學を終つてから、僕等は日盛りの庭を廻り過ぎ、廻廊から廻廊を通過して、藏書樓に急いだ。こんどはテト師といふ老僧が案内してくれた。

藏書樓の二階は洋書部である。支那に関する洋籍が書架にギッシリ詰つてゐた。僕の眼は革表紙の背中から背中へと注がれた。英・佛・獨語の書物ばかりではない。ラテン語の洋籍も多かつた。するとテト師は「此の本は御存じですか」と言つて僕に示したのは「耶蘇會士書簡集」の第一巻であつた。

「知つてゐます。僕は讀みました。日本の〈東洋文庫〉にあります。」と僕は答へた。

それからテト師はデニ・アルドの「支那帝國全誌」だの、ル・コントの「支那現狀新誌」だのを見せて呉れた。

此等の古書は世界の稀覯書であるが、皆、僕が「東洋文庫」で参照したものである。最後にテト師がブライエの「康熙帝傳」を示した時、「この本は私がこんど支那に行く前、翻譯しました。」と僕は答へた。

最後に見せて呉れたのはクープレの「徐甘弟傳」であつた。

「これはクープレの原筆です。」と言つてテト師は肉筆の原稿を示して呉れた。此の原稿は青い蠟紙ワセリに包まれてゐて、保存の好いせぬか、三百年前に書いたものとは思へないほど綺麗であつた。筆蹟にも力が籠つてゐた。前述の通り、クープレ（杜應理）がイントルチニッタと共に「支那の哲學者・孔子」のラテン譯を監修した。クープレは支那の「年代記」を執筆して、これを「支那の哲學者・孔子」の巻末に附録した。併し僕は彼が徐光啓の次孫女、徐甘弟の傳記を綴つたとは夢にも知らなかつた。

テト師の話によれば徐甘弟夫人は祖父の影響を受けて深く天主教に歸依した。夫人は教會建立のために淨財を寄進したいとクープレに申出した。クープレは無論、この申出を欣諾し、大小の教會を卅五箇所に建立した。また此の夫人は自費を拠つて聖書を刊刻し、諸方の教會に配つた。家庭人としても、夫人は勿論、婦徳圓滿で、その徳行は公教の模範として仰ぐべきものがあつた。とにかくクープレは夫人の篤信に感激して、夫人の信仰行傳を書き残した。この傳記は一六八八年に佛譯され、またスペイン語やフランス語にも翻譯された。最後に一九一七年、「許太夫人傳略」といふ標題のもとに漢譯された。併し僕の興味を引いたのは徐甘弟の篤信よりも、クープレの肉筆其の者であつた。一六五六年の遠い昔、遙々、支那に渡り、ルイ十四世の内命を奉じて經書の翻譯を監修し、「支那年代記」を書いたベルギー人、耶蘇會士、クープレの肉筆を

ゐた。殊に花瓶を載せた臺上には白網が敷いてあつた。その形といひ、模様といひ、いづれも優雅であつたが、僕の何によりも驚いたのはその互きまであつた。卒業式の式場を飾る花瓶、また料亭の三間床を飾る花瓶よりも遙かに大きい。支那の花瓶は、花を生けずとも、單なる花瓶として單獨の裝飾價值を有するのである。支那といふ國名が陶器を意味するほど、流石に支那は陶器の本場だと思つた。前にも述べた通り、ルイ十四世が支那の陶器を見て、その美しさに感心して、これほど立派な工藝品を産出する國民には立派な文明があるに違ひないと考へて、耶蘇會士に支那文明の研究を命じたといふ話も、決して傳説ではない。かのフォンタンブローの宮殿にも、「支那陶器の間」が現存してゐることから考へて、當時、如何ほど支那の陶器がフランスの貴人貴女に尊重されてゐたかが想像されるのである。併し僕は此等の陶器を美しいと感ずるだけで、陶器に對する知識を持つてゐないから、時代も、種類も、産地も、窯も一向、解らない。僕は自分の無識が怨めしかつた。そして出土の古碑を前にして、この碑文が讀めずに、茫然として異邦文字を見詰める考古學者の姿を目に浮べた。

もう一つ僕の目に残つてゐるのは、ミイラの陳列である。そのミイラは何ういふ時代か解らないが、肉は無くなつて皮膚が骨にピッタリ附着してゐるので、身體全體が小さく縮つてゐた。窪んだ眼の上には眉毛が残り、口もとには八字髭が残つてゐた。殊に頭部には白髪交りの一房が鮮

やかに認められた。

この老人はいつの時代の人か、如何なる經歷の人物か。まさかミイラに變つて我々、他國人の眼に醜體を曝らさうとは夢にも考へてゐなかつたらう。その肉體が國土と同化せず、博物の標本として擱り出された此の老翁の數奇な運命に微笑を送らずにはゐられなかつた。

夜は城外の馬祥興といふ飯店で佐藤君主催の宴會が開かれた。支那では招待返しをするのが儀禮である。お客は昨夜の連中であつた。この馬祥興といふのは同じ支那人でも、同教徒の經營する料理屋である。だから料理には豚を使はずに羊を使ふさうである。

入口には主人が陣取つてゐた。主人は恐しく體格がよく、鼻下にはタラリと下つた八の字鬚を貯へ、上半身は裸體であるが、まるで角力のやうに肥つてゐて、三國志に出てくる豪傑を偲ばせる。それで僕等に會釋したり、支那語の解かる人達と話をする様子を見ると、愛敬が溢れるやうで、可愛らしい處がある。

僕等は鳥や肉の並んでゐる板場を通つて、會席へ通つた。南京一流の飯店ださうだが、その席は六華春の座敷よりも遙かに粗末で、汚い。まるで物置同然である。天井がない。電氣の線がむきだしである。僕はツツツ考へた。昨夜の六華春も汚いし、今晚の馬祥興はなほ汚い。それでゐる南京一流の料理店である。日本では近頃、流行の「おでんや」にも何處か料理屋らしい悪氣

な趣がある。まして一流の料亭に遣入れば、床の間の軸物や活花にも、季節ものを配し、疊は骨く、座蒲團の感觸は柔い。食膳の配置はもとより杯の酒戯しに山水の姿が見えるし、折から月のよく射した縁側の障子には松の枝ぶりが映つてゐる。口からの美味鑑賞には藝術的景團氣が必要であり、總てが綜合藝術である。併しながら支那人には喰べ物だけがうまければ、席場などは問題ではない。口腹の嗜欲だけが盛んに活動し、その要求を満たせば能事了れりである。あれほど古い文明を持ち、あれほど藝術感の優れた支那人の性格の一面に斯ういふ實利的な、現金な性情があるのである。

「花より團子とは支那人のことだ。」

僕はかう考へて支那の國民性の奥深い一點、言はば國民精神の特別益を覗き込んだ氣がしたのである。

## 九 杭州・蘇州見物

六月十八日、僕は研究所の富田君の案内で杭州見物に出かけた。僕等は午後三時、上海停車場から汽車に乗つた。僕が支那の汽車に乗つたのはこれが初めての経験である。此の沿線にはまた敗残兵や匪賊が出沒して、汽車を爆發させるさうであるから、朝早く貨車を遣し、それから客車を通すさうである。僕の乗つてゐる汽車の先頭には貨車が數輛ついてゐるので、爆發を被つても、客車には被害がないから安心して好いと富田君は言つた。却つて斯ういふ話を聞くと僕は薄氣味が悪かつた。

僕等の客車は可なり込んでゐた。僕の前には若い令嬢がたつた一人ひとりで乗つてゐる。勿論、支那人である。圓顔で、前髪が額の上まで垂れ、頬邊を眞赤まことに染めてゐる。水色の夏服の肩から腕腕がムキ出しである。體格がガツテリして、腕もふとい。肌のキメが荒く、蚊の食つた跡が随々、残つてゐる。そして片腕には恐しいほど太い金の腕輪うでわを穿めてゐる。僕は久しぶりで山吹色を凝

視した。戰敗國の女性が鍔金の腕輪を飾つてゐること、が甚だ不合理に思はれたからである。この娘には何處に卑しい點がある。良家の令嬢でもなく、さりとて奴女でもない。なんだかダンサーらしい氣がした。彼女は退屈すると片腕を汽車の窓に凭れ、その上に下顎を載せて、窗外を眺めてゐた。そして眞直に腰をかけ直すときには着物をたくし上げる。その時、ゾロスの端が見えるので、目を背向けずにはゐられない。

どの停車場にも我が兵士が四五名、帽子の後から長い日覆をたらし、銃を擔いでプラットフォームや構内を往來して警戒を怠らない。停車場にはトーチカが築かれてゐるし、鐵條網が張り廻らされてゐる。晝間はとにかく、眞夜中に隣りの停車場と連絡の心細い状態に置かれた我が警備兵の勞苦を察して、僕は彼等に敬意と感謝とを捧げた。

汽車の窓から廣々とした畑が見える。日本では田畑から直ぐ先きに山が見えるが、支那では一掌半の廣さで、ただ田畑の連続が見えるばかりである。そして田畑の中には先祖累代の墳墓が見え、親から子へと一家の人々が百姓として生死を重ねて行くといふ支那農村の傳統生活がハッキリ認められる。クリクが田畑の間を流れて、彼方此方で子供が四五人、水草を踏んでゐる。小さい釣瓶のやうな桶が廻轉して、水をクリクから汲みあげるののである。もう夕ぐれ、牧童が水牛の背中に乗つて歸つてゆく。僕はその姿を見ると「牧童の寒笛、牛に倚つて吹く」といふ優

渾然忘樂の一句を思ひだしたのである。これによつても支那の農村社會が千年來、普通の生活繪卷を繰り續げてきたことが肯綮される。

午後八時、汽車は杭州に着いた。僕等は華中水電の人に迎へられて、西冷飯店に投じた。折から暮れ方で、西冷飯店の樓上から西湖の暮色を心ゆくまで眺めた。

その夜、西冷飯店の總ロマネージャーが僕の部屋に遊びに来て、雷田君と僕を相手にして、零時半過ぎまで話していつた。樋口さんは商賣柄、英・米・獨・佛人の國民性をそれぞれ例を擧げて説明し、

「日本人は世界中で最も優良な人種だと思ひます。もう少し國際的感情が發達してゐれば完全な國民です。」と力強く斷言した。

その時、樋口さんのギョロリと光つた眼付が今だに僕の眼に残つてゐる。

翌朝、朝飯前、樋口ロマネージャーに案内されて岳飛廟を見物した。この廟は西冷飯店から五六町の處にある。御承知の通り、岳飛は南宋末の忠臣である。秦桧の業槍が金と和を講じようとした時、彼は盛んに主戰論を唱へた。實際、彼は金軍と大小百餘戰を交へたが、一遍も敗れたことがなかつた、故に岳飛が主戰論を唱へたことには、武將として立派な理由があつたのである。然るに秦桧は高宗の意を體して、金の鼻息を窺ひ、岳飛の選論は自己の敗論を妨げるものと考へた。

洋文化を知らずして西洋文化を研究することは無意味であることを主張した。すると錢稻孫氏は「中國でもこちらの學問を研究するものは自分の國のことはあまり研究しないやうです。」と答へた。僕はまた嬉しかつた。

それから錢稻孫氏は電話で僕を周作人氏に紹介して下さつた。周作人さんは僕の來訪を待つてゐるとの返辭であつた。それで僕は錢稻孫氏に厚く御禮を述べて別れを告げ、また杉本君と一緒に自動車に乗つて周作人氏を來訪しに出掛けた。自動車は大通りから横町へ曲つて、横町から横町へと進つて行く。横町の道は幅、二間足らずで、無論、舗裝されてゐない。兩側に黒い土塀が続いて、その土塀には落書がしてあるし、路はたで子供が遊んでゐる。道はゴゴボゴで、自動車が上下に酷く振動する。そして砂ぼこりが立つ。丁度、今から三十年ほど前の東京風景である。僕は震災前まで、雨の降る日にはゴムの長靴をはいて大通りや横町を歩いてゐたことを思ひだした。北京は東京に比較すると道路文明が四分の一世紀ほど遅れてゐると考へた。

そのうちに自動車は周作人氏の邸宅の前でまつた。門前には支那の兵隊さんが銃を擔いで立つてゐた。周作人氏は有名な魯迅すなはち周樹人の弟で、今では河北省の教育督辦であり、言はば此の省の文部大臣である。それ故、門前に衛兵が立つてゐるのである。

周作人氏は錢稻孫氏より少し若く、圓顔である。濃厚な髭付の中にも昔、文學革新の團將であ

つた氣宇が隠されてゐる。僕は周作人氏から今後の教育方針、日支親善策などについて質問されたので斯う答へた。

「御存じの通り、支那人には支那人の特異性があります。また日本人には日本人の特異性があります。この特異性の内容は他國民がたとひ觀念的には把握出來ても、感情的には感得することが出來ません。なぜなら特異性だからであります。従つて「元且や一系の天子宮土の出」といふ心境は到底、支那人には感得することが出來ないと思ひます。ですから斯ういふ日本人に特有な心理、謂ゆる日本精神を支那人に強ひたり、支那人を日本化したといふ考へは無用であり、却つて弊害を醸す虞れがあります。日支兩國は共通な精神面から、もしくは天下に共通な公理上から教育方針を決定しなければならぬと考へます。そして國際親善を増進するには經濟交換、文化交換を行ふに限ると思ひます。日本と支那の交渉史を調べますと、「唐物」の輸入がどれほど日支の親善に貢献したかが解ります。また漢單の輸入がどれほど日支親善の効果を擧げたかも解ります。そして經濟交換と文化交換とが同時に行はれてをります。經濟交換の問題は暫く論外に置き、一國の文化が他國に進出することは一種の平和的進駐であります。言はば平和的征服であります。併し此の征服は征服するものが、征服されるものに恩恵を施すのでありますから、却つて相手から感謝され、尊敬されるのです。相手は心服し、悦服します。

この意味から観て、文化は最も有力な國防機關だと考へます。

併し文武兩道と昔から言はれるやうに、軍備と文化とが平行してゐないと、フランスのやうに慘敗を喫します。とにかく日本も中國も今後はますます文化創造に精進して、立派な文化の交換を行つて、昔のやうに親善現象を發揮したいものです。」

僕は二十分ばかり周作人さんと話して辭去した。僕はもつとお話しをしたかつたが、何分、周作人氏は劇職の人であるから、御遠慮申上げたのであつた。

僕の自動車は横町から横町を通り抜けて、賑やかな大通りに出た。前には赤と青の輝彩色を施した牌樓が見える。朱塗の柱が四方から此の牌樓を支へてゐる。兩側は楊柳の並木で、枝垂れた枝先が緑の煙で牌樓の前面を隠してゐる。その時、僕は「瀟湘の楊柳、綠絲の煙」といふ詩の句を思ひだした。そして此の詩の作者と一緒に美しい實感を味はつた。

ペリーはマロニエの都である。

北京は楊柳の都である。

## 一五 大同の石佛と北京大學の招宴

七月三日早朝、北京驛を出發して、張家口に向ふ。暫くウトウトして目をさますと、汽車の窓から萬里の長城が見えだした。僕は驚疑として山をめぐる城塞や、雲をつくかと思はれる城櫓を眺めて、今更ながらその雄大なことに驚いた。萬里の長城はもと秦の始皇帝が匈奴の侵襲を禦ぐために趙、燕時代の城壁を補足したものである。秦以後、しばしば修復され、殊に明代に至つて大修築を加へたものだといふ聞いてゐる。第一次歐洲大戰後フランスはドイツ軍の侵襲を防ぐためにマジノ要塞を築いた。するとドイツもこれに對抗してジグフリート要塞を築いた。併し兩要塞もその長さから見て、到底、長城の比ではない。現代人は兩要塞の雄大さを激賞してゐるが、萬里の長城が西曆前から東亞に築かれてゐたことを忘れてゐるらしい。隋の煬帝は運河を拓いた。この運河もスエズ運河、パナマ運河よりも遙かに古く、遙かに長い。北京の宮殿は金・元をへて、清初に至つて完成したものである。雄大な麗といふ點から見れば、ヴェルサイユ宮殿も到底、及